

# 訳者あとがき

---

本書は、世界的に有名な F.E. Vega 博士と M. Blackwell 博士によって編集された、“Insect-Fungal Associations : Ecology and Evolution” の翻訳である。その書名が示すように、昆虫と菌類の関係を生態学および進化的に比較考察したものである。両博士を含めて20名、アメリカを中心に、カナダ、イギリス、デンマーク、オーストラリアで活躍する気鋭の研究者たちによる著作が集められている。独自の視点から描かれた先端的研究が、11章の総説として紹介されている。その内容は、実にバランスのよい構成となっており、敵対的（寄生）から協調的（相利共生）へと配置されている。

導入部に書かれているとおり、昆虫と菌類の関係を扱った同様の書物は1980年代に相次いで出版された。Blackwell 博士も、当時に主催したシンポジウムの成果をまとめている。日本には、残念ながらこの研究テーマに関する総合的なテキストがなかった。私は、大学院生の時に上記の書物を読み、大変勉強になった。全体像を把握するバイブル的な存在であり、研究を進展させる上で非常に有用であった。原著は、その約20年後に再び著された集大成である。最新のデータを取り入れて、さらに広い分野（昆虫学、菌学、生態学、進化学、分子生物学などを基盤として、農学、森林学、環境学などの応用領域、さらには文化人類学まで）を網羅した、より“進化”したものになっていた。これに感銘を受け、翻訳を企てたしだいである。しかし、非力な上に、私の専門は菌類を運ぶ昆虫の生態である。そこで、共同研究者であり、昆虫に随伴する菌類を中心に幅広く研究を展開されている升屋勇人博士、そして昆虫寄生菌および昆虫病理学の専門家である佐藤大樹博士に協力を要請した。その結果、お二人からご快諾いただき、何とか動き出すことができた。

翻訳にあたっては、第1, 2, 3, 5章を佐藤、第4, 6, 9, 10, 11章を升屋、残りを梶村が担当し、下訳を行なった。また、必要に応じて、訳注を入れて説明を

加えた。なお、意識した部分も多い。これらを私が一度統合し、文章や単語などの調整を図った。ゲラの内容確認は、担当者ごとに行なった。最終チェックは、索引項目の選定を含めて、私が行った。全体として、十分に統一できたとは言いがたい。原著自体が多数の研究者によって書かれており、その表現や文体などのスタイルが個性的であることを差し引いても、主たる原因は入念に調整できなかった私の力不足にある。原著の意を汲み取れていない部分があれば、忌憚なくご意見・ご叱正を賜れば幸いである。

本書の出版については、実に多くの方々のお世話になった。濱口京子博士（森林総合研究所）、秋庭光輝博士（森林総合研究所）、島津光明博士（森林総合研究所）、高務淳博士（森林総合研究所）、田辺雄彦博士（国立環境研究所）、岩野秀俊博士（日本大学）、神崎菜摘博士（森林総合研究所）、松浦健二博士（岡山大学）、松本忠夫博士（放送大学）、大場裕一博士（名古屋大学）、新美輝幸博士（名古屋大学）の皆様には、専門的な事柄についてご教示いただいた。特に、濱口博士と秋庭博士には第1章、田辺博士には第5章、松本博士には第8章の全体にわたって、筆を入れていただいた。記して感謝申し上げるとともに、貴重なお時間を拝借したことをお詫びしたい。加えて、共立出版株式会社の信沢孝一氏には、大変なご迷惑をおかけした。こちらから話を持ち込んだにもかかわらず、不手際の連続で予定日から大幅に遅れてしまった。心よりお詫び申し上げると同時に、辛抱強く完成に導いていただいたこと、衷心よりお礼申し上げます。また、財稲盛財団および財発酵研究所の研究助成は、翻訳を推進させる大きな力になった。記して感謝申し上げます。最後に、私事で恐縮だが、妻子にも迷惑をかけた。家族サービスの時間をそれほど多く削ったわけではないが、遊び盛りの幼い子供たちには何かと不満だったらしい。ごめんなさい。

Blackwell 博士は、20年目という“縁起”を祝い、原著を出版した。実は、「縁起」の語源は、「因縁生起」という仏教の根本思想のようである。一切の事物は、固定的な実体を持たず、様々な原因（因）や条件（縁）が寄り集まって成立しているという意味である。つまり、すべてのものは繋がり合っており、その関係は変化しうることが表現されているものと思われる。奇妙な偶然だが、昆虫と菌類の間にみられる寄生あるいは相利共生の関係は、まさにこのような状態にあるのではないだろうか？ 日本においても、個々の関係の研究はかなり進展してきたように見える。しかし、それらを有機的に結びつけて吟味する点においては、世界的な潮流と比較すると、まだ十分ではないように感じる。本書が、昆虫

と菌類の関係について、少しでも多くの方々の興味を呼び起こし、そして総合化の重要性を理解するきっかけとなれば幸いである。

記録的な暖冬の続いた2007年の早春、名古屋大学東山キャンパスにて

**梶村 恒**（訳者代表）